

民主島根

2018年
7.29
第1316号

発行所 松江市袖師町3-6 TEL 0852-24-2444
日本共産党島根県委員会 FAX 0852-24-6369

出雲、松江で日本共産党演説会ひらく 党は共闘の「懸け橋」

出雲・笠井氏、松江・小池氏、両会場で950人参加

日本共産党の出雲支部長・衆院議員を迎えた演説会が15日に松江で、16日には小池晃書記局長・参院議員が松江市での演説会で講演しました。両会場、尾村利成、大国陽介の両県議も訴えました。

被災者支援・命を守る政治を

出雲・笠井氏

笠井氏は、西日本に甚大な豪雨被害が発生しているにも関わらず、延長国会で悪法の強行を続ける安倍政権に対して「市民と野党の共闘と日本共産党の躍進で来年の参院選、統一地方選で安倍自公政権を総辞職に追い込もう」と呼びかけました。

笠井氏は、民主主義を根本から破壊した森友・加計疑惑を棚上げし、豪雨災害で避難勧告や避難指示が出ている中、カジノ法案などの推進を狙う安倍政権を批判。「国民の命を軽視する安倍政権に出雲からもノーの審判を」と訴えると、大きな拍手がわきました。

住民目線で政治を変える会・山陰の福島浩彦共同代表が連帯あいさつ。仁比そうへい参院議員、大平喜信前衆院議員、立憲民主党の亀井亜紀子衆院議員からメッセージが寄せられました。

松江・小池氏

満杯となった会場で、小池氏は西日本豪雨災害の犠牲者に哀悼の意を述べ、県内の床上浸水などの被災者にお見舞いを述べました。



声援に応える(左から)大国、小池、尾村の各氏(16日、松江市)



(左から)尾村、笠井、大国、福島各氏(15日、出雲市)

小池氏は、安倍首相らの5日の宴会「赤坂自民亭」を批判し、「6野党は一致して、災害対策優先で取り組むべきだと申し入れてきた」と指摘。与党がカジノ法案などの審議を強行したことに対して「いま国会に必要なのは賭博場の解禁ではなく全壊住宅支援の500万円への引き上げなど被災者支援に全力をあげることで」と強調しました。

被災者の生活再建を

党県議団らが県に申し入れ

日本共産党の尾村利成、大国陽介の両県議は11日、豪雨の被災地や避難所で寄せられた要望を受け、県に対し、被災者の生活再建を支援する

来年の参院選と統一地方選に向け、比例目標「850万票、15%以上」の達成のために「野党をつなぎ、市民との懸け橋になる共産党をどうか強く大きくしてほしい」と力を込めると、会場は大きな拍手で応えました。立憲民主党の亀井亜紀子衆院議員が連帯のメッセージを寄せ、住民目線で政治を変える会・山陰の福島浩彦共同代表が連帯あいさつしました。



農地被害を受けた奥出雲町から河西明徳町議、江の川など河川の氾濫によって床上・床下浸水などの被害を受けた江津市の森川佳英、多田伸治の両市議、美郷町の中原保彦町議、川本町の山口節雄町議が同行しました。参加者は「江の川上流の広島県は堤防がほぼ整

備されているのに対し、下流の島根県は十分に整備されておらず、未整備の地区が水害に見舞われた」と指摘し、堤防が整備できるまで通行できない県道の修復による避難経路の確保、水門の設置など防災・減災対策を実施するよう求めました。山口和志防災部長は「関係部署、被災市町と議論を進めている。できるだけのことはやりたい」と答えました。

山下・江津市長と意見交換



日本共産党江津市議団は17日、被災者の生活再建支援について山下修市長と懇談しました。尾村利成、大国陽介両県議が同席しました。(写真) 山下市長は、市が力を入れて有機農業農家(桑やゴボウ等)が被災していること、泥に浸かった農機具などの救済をどうするか検討している。新たな耕作放棄地をうまくないよう力を尽くしたい」と語りました。(2面に関連記事)

鼓動

先日、落語家の桂歌丸さんが亡くなった。享年81歳だった。歌丸さんは、中学を出ると落語の世界に弟子入りして、以来、「笑点」のテレビ出演を続けながら落語の芸を磨いてきた。また、平和を愛する「苦労人」でもあった。歌丸さんの凄いとところは、入退院を繰り返しながら、死の3カ月前まで酸素マスクをつけながらも高座をつとめたことである。それほどに落語にける執念はすさまじかった。歌丸さんの死を知ったのは、入院中のベッドでテレビを見ていた時である。▼わが身は数年前に咽頭腫瘍の切除で、昨年末は脳梗塞で、そして今回は大腸腫瘍の切除で入院を余儀なくされた。回を負うごとに入院期間が長くなって、本来ポジティブな性格だが、さすがに自信を失くし意気消沈していただけに、報じられた歌丸さんの生きざまには大きな刺激を受けた。▼人は誰も老いと病からは逃れられない。いわば宿命である。しかし、病に伏した時に、その境遇からいかに生きるのか、その後の余生を大きく左右する。病や老いを理由に内に閉じこもるのか、それとも、そこから少しでも前に向かい一歩踏み出そうとするのか。▼この点で見習うべきは、作家の瀬戸内寂聴さんの生き方である。瀬戸内さんも若いときから様々な困難にめぐり合い、高齢になって入退院を繰り返した。しかし、その生き様は一貫していた。「人は死ぬまで自分を変革できる。それが生きるということ」を信条に、常に新しいことに挑戦。寂聴さんに見習い、「もうひとふんばりするか」と入院ベッドの中で決意した。(吉)